円地文子全集

第七巻

円地文子全集

第七巻

新潮社

第四回配本（全十六巻）

円地文子全集　第七巻　　定価三三〇〇円

昭和五十二年十二月十五日　印刷
昭和五十二年十二月二十日　発行

著　者　円地文子
© Fumiko Enchi, Printed in Japan 1977.
発行者　佐藤亮一

発行所　株式会社　新潮社
郵便番号一六二　東京都新宿区矢来町七一
電話　業務部　東京（〇三）二六六一五一一一
編集部　東京（〇三）二六六一五四一一
振替　東京四一八〇八番

印刷所　東洋印刷株式会社

製本所　神田加藤製本株式会社

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。
送料小社負担にてお取替えいたします。

円地文子全集　第七巻　目次

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

秋のめざめ　7
愛情の系譜　179
解題　411

円地文子全集　第七巻

秋のめざめ

下段のひと

大きい花束を抱えたハイヒールの髪の長い女がデッキに立ってホームの見送り人と早口に喋っている。演奏会帰りの歌手だなと思いながら、麻枝は擦りぬけて寝台車へ入って行った。

「二十九番、はい、こちらでございます」

中年のボーイが狭い廊下を先に立って、中ごろのコンパートメントの小さい扉を開けてくれた。両側に上下二段、都合四つあるベッドのカーテンは皆絞られたままで、真白いカバーが露わに口をあいている。

「あらアみんな空っぽ？　珍しいわね」

麻枝はレーンコートやボストンバッグを自分の寝る筈の上段へ一つ一つ投げ上げながら言った。社用で大阪へ来る時、よく乗る寝台車だったが、発車間近に来てこんなに空いていることは殆どなかった。

「いいえ、向う側は上下お二人とも京都からなんです。この下だけ大阪からになってましてね。空いてれば下とお換えするんですが……」

「ううん、いいのよ。私下があっても上へ乗るの。その方が好きなの。面白いでしょう」

いう間もなく、踵の低いパンプスをすっぽり脱いで、窓際の鉄梯子に両手をかけたと思うと、するするとたぐって見る間にひらりとベッドへ飛び乗った。カーテンがさっと降りる……悪戯っ子じみて素ばしこく動く華奢な背中や小さく緊った腰の丸みをボーイは一瞬あっけにとられて見上げていたが、廊下で席を訊ねている客の声にあたふた外へ出て行った。

靴下だのブラジャーだの、ウエストニッパーだの、肌から剝ぎとった細々したものを案外つつましく纏めてきちんと網棚へ載せてから、麻枝は糊のきいた貸寝巻に着かえて、

ゆっくりベッドに身体をのばした。顔の真上に奇妙な近さで、白く塗装された天井が蒲鉾型の丸味を半分見せている。その低い天井と緑色のカーテンの壁に仕切られた畳一帖より幅狭い空間を、麻枝はのうのうと見上げていた。気難かしいので有名な大阪の実業界の立物との初対面のインターヴューが、思いの外うまく運んだので今夜の麻枝は上機嫌なのである。先刻、ボーイ相手に口に出した「面白いでしょう」というあとの言葉が滑々白い天井に向けて口笛でも吹くように自然に声になった。

「寝台の下段って、寝ている上に必ず誰か一人乗っているんだもの……それも大抵は男！　こっちが上で寝る方が余っぽどいいわ」

その時、

「ああそう……この下だね」

という声がして、麻枝の寝ているベッドの下にゆっくりものを置く気配がした。

「ああ、それはたしか鮓だから、君の部屋のどこか蒸れないところへ置いといてくれ給え。いや、鞄はいいよ。え？　ああ、降りるのは品川……やあ、御苦労さま」

麻枝は寝たまま、ビニールの化粧バッグからクリンシンクリームを出して顔を拭きながら下の声に耳を立てていた。

渋い味のある声だ。きっと、こういう声の主は中年のインテリ男に違いない。声帯にどこか一ヵ所すり切れたところがあるように、声が掠れるのだが、その透らない細さが発音のはっきりした穏かな言葉つきと交りあって、人生のこくみたいなものを感じさせる。麻枝はこの頃会社の機関誌を編集していて色々な階級の人に接する間に、顔つきよりも声音について一種の勘が働くようになった。下段の客の風采をその声から想像して、ちょっと実物を窺見したくなったが、起上るのは面倒でその思いつきは打切ることにした。

発車のベルが鳴っている。

重く一つ揺すれて、急行列車は大阪駅を離れた。車内の廊下はまだ寝台におさまりきらない客の往来でごたごたしている。

「その花、水につけておいてね。荷物になって困るんだけど……」

甲高く言いながら歩み過ぎて行くのは、先刻の流行歌手であろう。

箱棚のように重なった狭い寝台の一つ一つに否応なしに押し込まれて運ばれてゆく夜汽車の客の一人であることが、麻枝には何となしにひどく面白かった。梅雨時の暑くもなし寒くもない寝心地のよさもその面白さに山葵のような快い辛味を加えた。

「アズ　ウィ　ラッシュ、アズ　ウィ　ラッシュ　イン　ザ　トレーン……」

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

麻枝は高校時代に暗誦した英語の詩に自分勝手な節をつけて吟(くちずさ)みながら、この分では京都まで行かない中に眠りこんでしまうだろうと思った。

静かに扉のあく音がした。

おやと思った時、下段にまだ洋服も脱がず、煙草でも喫っていたらしい男客が、風にあおられたようにさっと立上る気配がした。寝台がギシリと鳴った。

「どうして?」

息をひくように後の声は聞きとれなかった。驚きがカーテンの中にまでこみ入って来た。

「参りましたわ」

女の声から感情はまるでよみとれなかったが、身体中びっしょり濡れているような感じが何となしに麻枝に来た。

「どこにいたんです。ちっとも知らなかった……」

「お隣の二等に……動き出してからでないとあなたに追い返されることがわかっていたんですもの……」

「まさか……」

男は苦笑した様子である。

「大阪にいらっしゃる間中、あなたは逃げまわってばかりいらしったじゃありません? こんなはずかしいこと、世の中で私の一番嫌いなこと、あなたは私を借金取りになさったのよ」

「まあ、お掛けなさい」

男は女の静かすぎる声を防ぐように強いて陽気な調子でいった。

「このベッド皆空いてますわね」

「京都で乗るんだそうですよ。京都までは小一時間あります。ゆっくり話しましょう」

「ゆっくり……一時間がゆっくり……」

女の声は地の底へめり沈むように再び跡切れた。

女が汽車の中まで男を追っかけて来る、やれやれと思いながら、やっぱり麻枝の横になっていた上半身はそっと肘を張って起上っていた。カーテンの外に男と向きあって立っているらしい女の顔が見たかった。

しかし錆声の主は、その時麻枝の身動きした気配を敏感に嗅ぎとったらしく、小さい声で女に何かささやいた。この上に人が寝ている、まだ寝ついてはいないとでも耳うちしたのかも知れない。女の身体は男に肩でもおされたらしく、じんわり下に沈みこんで、麻枝ののぞいたカーテンの隙間からは向い側の空のベッドが白々見えるだけであった。

男は立上って扉をあけた。

「どうして閉めてお置きにならないの」

「寝台に二人いるのは御法度ですよ。まだ時間が早いから、こうして置けば構わないでしょう」

「あなたはいつもそういう方ね。逃げ口をちゃんと用意していらっしゃる」

「ははは……」
男は乾いた声で笑った。
顔は見えないが、明らかに上段のベッドに寝ている女客を意識に入れている態度である。
梯子の下に脱ぎすててある銀鼠のパンプスを彼の手は女に指さしているかも知れない。
しかし扉は開け放しでも閉めきってあっても、ただ事ならぬ情事のもつれが現に麻枝のねているベッドの下で演じられていることに一向変りはなかった。話声は列車の振動と騒音にまぎれて殆ど聞きとれないほど小さくなったが、麻枝には下の男女が低い天井の下で身をこごめあってひそひそ語りあっている様子がありあり見えるような気がした。完全な安眠妨害である。
扉を開け放して置くという逆手な意思表示で麻枝への弁解を作っておいて、男は手のつけられないほどこぐらかった女の情緒を解きほごすのに骨折っている模様である。時時老人じみた説諭の口調が言葉は聞きとれぬままに耳をくすぐるのを、麻枝はこましゃくれた上眼遣いできいていた。女の声は聞えなくなって鼻をすする音が折々きわ立って聞えた。
京都駅へ着くと、ボーイに案内されて、ふたり連れの男客がどやどや麻枝の部屋に入って来た。今まで、飲んでいたらしく、大声に喋りながら、洋服をぬぎはじめた。
下段の男客は二人の入って来るのと入違いに女を送って出て行ったらしかった。あれほど満たされない情熱にたぎって列車に乗込んで来た女は何の手形をうけとったのか、まるで幽霊のようにいつの間にか車室から消え去っていた。
新しい二人の客は寝巻に着かえる間中いま覚えて来たばかりの小唄のメロディを繰返して歌いあっていた。二人がやっとベッドへ入ったあと、廊下に待っていたらしい先刻の男がゆっくり入って来た。
大阪で乗込んで来た時と同じ音のない動作で寝支度をしている模様である。
あの女は隣の二等にいるのだろうか。家出して来た様子でもなかったから、恐らくは男に言いなだめられて、京都から又すごすご引きかえして行ったものであろう。
関西訛の言葉つきから推して、大阪近くに住む人なのだろうと想像された。商売女でないことは若い麻枝にも解った。人妻かしらと思ってみた。今になって、姿を見ておかなかったのが残念である。トイレットに行く振りをして、二人がひそひそ話している前へさっと飛び降りて見たら面白かったろう。その瞬間女よりも男の見せる反応が麻枝には興味があった。
ボーヴォアール女史の説によると、女は生れたときから内部に性の劣等感を持っているというが、麻枝には殆どその実感がなかった。大学にいる時も男友達との附合いでは

可成りわがままをしながら結構人気のある優等生だったし、今の会社でもこっちから好きになったことはないのに、麻枝を特別な眼で見ている同僚や上役は何人もいる。麻枝はそんなことに別に己惚れてはいない。雄が雌を追っかけるのは生物の世界の自然現象だと思っている。それだけにさっきの女のような逆な追っかけを見ると歯がゆくて気がくさった。

向う側のベッドからは物凄い鼾が聞えはじめた。

下段の男はどうしているか。まさかあの後すぐ寝つきも出来まいが、上の段の自分の眠れないことに恐らく責任は感じていないだろう。麻枝は起きていますよと報せるように何度も寝がえりした。下に寝た時の経験で低い天井のきしむのは気になるものだ。

あの女の人はきっと今頃陰鬱にうなだれて深夜の乗物に揺られていることだろう。私を借金取りにしたと言ったっけ、猫みたいに音を立てずにいなくなったっけ……あのままあの女が行方知れずになってしまったら……駅のホームから飛込み自殺でもしていたら……。

わあっという声がする、飛込んだ、飛込んだ……いえ嘘、嘘、汽車が鉄橋へかかったのだ……いつか麻枝は寝入ってしまった。

眼の覚めた時、汽車は止っていた。

沼津、沼津と呼ぶ声が聞える。

腕時計を見ると、六時半だった。寝つきの悪い時ほど、早く眼の覚めるのが麻枝の癖である。

昨夜は階下のおかげでえらい目にあった。今朝こそ加害者の顔をよく見てやろう。麻枝は梯子をたぐって通路に降りた。

寝台車の客は横浜近くなると一斉に起き立って洗面所へ殺到するので、麻枝はいつも眼がさめると朝が早くても構わずに顔を洗いに行くことにしている。その後、又ベッドへ上って一寝入りする。いよいよ同室の客が皆起き出したころに清々しい朝の化粧の顔でカーテンを開くのが、習慣だった。

洗面所でゆっくり髪を梳かして麻枝が帰って来た時も下段のカーテンは勿論垂れたままだった。麻枝はもう一度、上のベッドに身体をのばしてうつらうつらした。

二度目に眼を覚ました時は七時を疾うに過ぎていた。向う側の二人はまだ白河夜舟である。耳を立てると、下段ではもう眼を覚ましているらしく、新聞をひろげる音がばさりばさりと聞える。そろそろベッドを畳ませたがっているのかもしれない。そう思うと麻枝は急に気忙しくなって、細々した下着類を身につけはじめた。

汽車は少し前、熱海を出たところだった。ふっと真鶴あたりの海の朝景色が見たくなった。狭いベッドが座席にどんでん返しにされるまでの間他へ行っていようと思った。

麻枝は隣の特別二等車へさっさと入って行った。
夜汽車の特二は空いていた。座席に居ぎたなくまだ寝こけている客もあったが、大方は窓の明るさに早く眼を覚まされるらしく、櫛目の通ったさっぱりした頭が空席の多いシーツに並んでいた。男、男、ここも寝台車同様、男だらけである。
麻枝は窓際の空席に身軽に腰を降ろして、朝曇りのまだ眠っているような海へ眼をやった。晴れるのか雨になるのか見当のつかない空模様だった。
背後の席から若い男が立って来て麻枝の傍に立ちどまった。
「何だ！　やっぱりバンビだ。どうもそうだと思ったんだけど、厭に颯爽としているから……」
「あら、神保さん乗ってたの……ちっとも知らなかったわ」
「脇見もせずすうっとおれの横を歩いてったぜ。ファッションモデルかと思って見てたら君だ」
神保啄二は丸い肩をこごめて、麻枝の隣に腰を降ろした。
「出張？」
「九州へ行った帰りだよ。君この車にいたの……」
「いいえ、隣の寝台車よ」
「豪勢だな。君みたいなチンピラに寝台をおごるなんて、流石はイーストラインだよ。それとも『私が美人だかあら』か……」
啄二は流行歌を口真似して笑った。
神保啄二はK大学の教養学科で三年間麻枝と同級だった。と言っても大学へ入る時一年浪人したので啄二の方が年は一つ上である。
それでも都会育ちの早熟な麻枝は稍もすれば啄二を弟扱いして小癪な世話を焼く。才気走った男なら小生意気だと思うところを、啄二は身体つき同様ぎすぎすしない気分なので、麻枝にやりこめられるのが子供と角力をとっているようで面白い。そんなことを言えば麻枝は怒り毛を立てるに決っているが、男には啄二のように女から斬りつけられるのが好きな質があるものである。
麻枝も馬鹿ではないから啄二のあっさり兜をぬぐのが半分八百長だとは知っていて、結構いい気持なのである。勿論恋愛だなんて思ってみたこともない。
啄二は去年の暮から勤めさきに近い麻枝の叔父の家の一部屋を借りている。それも麻枝が世話をしたのである。
「何だい、やにニヤニヤしてるなあ……何かいいことがあるのかい？」
「ううん、いいことじゃないの。お蔭で昨夜、ねられなかったんだもの」
「寝台車で何かあったのかい……君を襲う豪傑なんか現われそうもないがなあ」
言っている中に、啄二は急に思い出したらしく、

「ああ、君知らないだろう。印南藤子が足を挫いたんだぜ」
「知らない」
麻枝は大きい眼を一層大きくした。印南藤子は叔父の妻でつまり麻枝の義理の叔母に当る。かの女の職業が新劇の女優なので、麻枝と啄二はいつも陰でそういう呼び方をしていた。
「何時よ？　一体」
「僕の出張する前の日だったから、四日、……いや五日前だ」
「どうしたの……でも大したことじゃないんでしょ」
「レントゲンで診て貰ったら骨は折れていなかったそうだよ」
「そう？　じゃ入院はしてないの？」
「家にいるよ。しかし可成り長くかかるらしいよ。松葉杖をついてるよ」
「厭アね。何で又……」
言いながら、麻枝の頭にはあることがひらめいた。
「根太のぬけているのを知らないで、転んだって言ってたけど……」
「根太がねえ！　まあの家は古いは古いけど……」
言いかけて、急に小さい声で、
「雪朗坊主じゃないの？」
ときいた。
「かなあとも思うんだけど……こっちが訊く限りではないからね。ともかく骨折はないから一月半ぐらいで癒るそうだよ」
「じゃあ、今度の『仮面座』の公演出られないじゃあないの」
麻枝はきめつけるように言って啄二を見た。
「折角、久しぶりに主役がついて叔母さん喜んでたところじゃないの。罪だわ」
「そうだよ。イプセンの『小さいイヨルフ』か。来月の公演じゃちょっと無理だろうなあ……だけどまあ諦めるさ。跛になってでも御覧よ。女優は全然勤まらないもの……」
「そりゃまあそうね。でもそんなことになったら叔母さん、自殺し兼ねないわ」
「おっかねえな」
啄二ははぐらかして笑った。
「唯でさえあの家は化物が出そうに鬱蒼としてるのにさ」
「叔父さんどんな顔してた？」
麻枝は話を変えてきいた。
印南藤子の夫の吾朗は麻枝の死んだ父の実弟なのだが、父とは生涯仲が悪くて殆ど附合いをしていなかった。この頃麻枝が叔父の家と親しく行き交いするようになったのは学校時代に演劇研究会で印南藤子を呼んで指導して貰った

りしてからなのである。
死んだ父に言わせると印南藤子はわがままで虚栄心が強く、吾朗があんな中途半端な人間になったのも、半分は藤子と結婚したためだという。
しかし、実際につき合うようになってから麻枝はかえって藤子の方に親しみを感じるようになった。藤子はけばけばしいところの一向ない女である。麻枝は藤子のいうことやることでついぞ眼を驚かされたことがなかった。印南藤子の舞台人としてのひき立たなさも実はそこにあるような気がしている。不思議といえば今まで藤子が吾朗叔父と別れないでいることぐらいなものだった。
「叔父さんか……印南氏は印南氏的にいろいろやってるさ」
啄二は当らず触らずに言った。
「印南氏的にね……そうでしょうね。雪朗坊主、どうしてる？　静かかしら……」
「何だかよく騒いでるらしいよ。例の事件の時も僕は家にいないから知らなかったけど、階下のJ美術の学生が二人、泥棒が入ったのかと思って、飛び出して行ったって言うもの……そうしたら印南氏に呶鳴られたって……」
「いやあねえ。一つ調子が狂うと、あそこの家はまるで癲病院だものねえ」
「まあ、いいさ。藤子女史が跛にさえならなきゃ……」
「そうね。……でもそりゃひどい災難だったわ」
麻枝は細い腕を胸に組合せ、肉の薄い小鼻を花瓣のようにふくらませて、もう一度「ふうん」といった。
先刻話しかけた寝台車の事件はもうすっかり忘れている顔である。
啄二の方が話を戻した。
「寝台で何があったのさ。どうして寝られなかったんだい？」
「ああそうだ……？」
麻枝はきょとんとして、パチリと手を拍った。
「すっかり忘れちゃってた！　彼の顔見て来なきゃならなかったんだわ。きっともう起きているわ」
「何言ってるんだ……話せよ」
「そうよ。話すつもりだったのよ。印南藤子の捻挫事件で忘れてしまったわ。ともかく映画みたいな場面が、私の下のベッドで繰りひろげられたのよ」
「ベッドシーン？」
「ううん、ベッドシーンじゃない……けど矢張りラヴシーンの中かな。ラヴシーンとすればラストね。兎も角ラジオドラマだから……」
「思わせぶり言ってるぜ」
麻枝は大阪京都間の昨夜の声ばかりの女の出現を啄二に話してきかせた。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook